

二枚のクリスマスカード

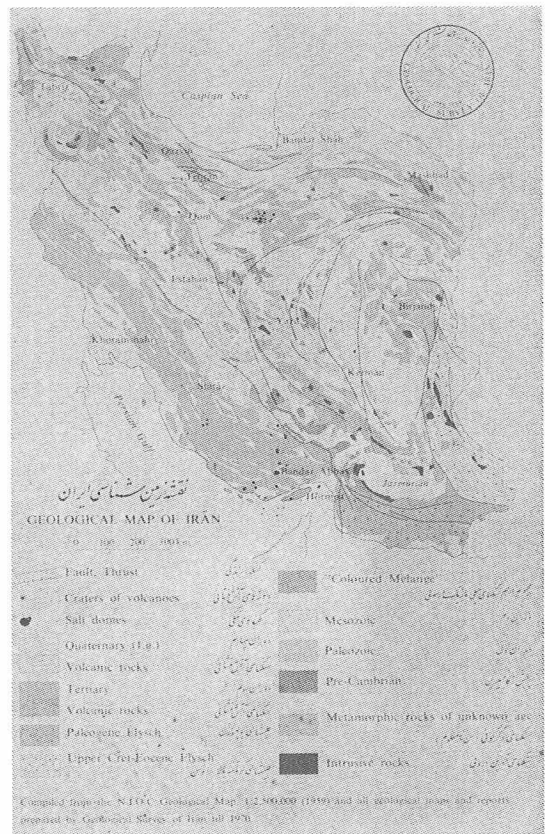
—イランの新年の思い出—

岩 生 周 一 (地質)

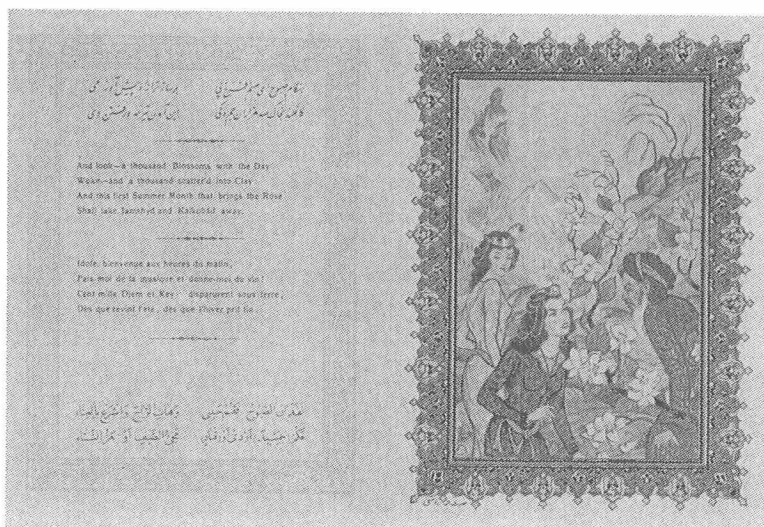
私がイランで大変御世話になった人達から贈られた沢山のクリスマスカードの中から2枚を選んでこの随想の糸口にして見た。一つはイランの地質調査所 Geological Survey of Iran の所長 Dr. N. Khadem 氏からのもので、他の一つは私のある友人からのものである。

最初のカードにはイランの地質図が色刷りで綺麗に印刷されており、図柄の凡例が英語とペルシャ語で簡単に書き添えてある。図の説明には、“1959年にイラン国有石油会社 NIOC が作った 250 万縮尺の地質図と、1970 までの新しいデータを基に編集したもの”としてある。もちろん非常に精緻な原図を最も簡略化したものであるが、一途に開発を目ざしているこの国の重要な職にある人の心意気と誇りを感じさせる。私はこの地質図がなぜか大好きで、折に触れては眺め、私がそこに滞在していた時 (1964~1965 の 2 カ年間) 歩いた幾場所かを思い出し、次に歩きたい地域を思いながら楽しむのである。

もう一つのカードにはイランの春あるいは初夏の楽園と言った風景を鮮かに頼ったものに詩が配してある。イランはイスラム教の国であるから他のアラブ諸国と同じイスラム暦があるが、イランではこの他にジャラーリー暦をもち、これがおもに慣用されている。春分の日を1月元旦とする一種の太陽暦であるが、綺麗でお伽の国のようなこの絵こそイランの正月 *nouruz* での人達の気持を表わしたものであろう。迂闊にも、私はペルシャ語で書かれている (英訳が添えてはあるが) 詩の本当の意味を教わっておくのを忘れてしまった。しかし、幻想的なこの絵にはイランの正月——3月21日から約一週間——の実感がよく現われている。イラン高原の大部分を占める砂漠と半砂漠の生活には、山脈からの雪融水の流れる



谷あいや、その地下水を大事に引いて作った僅かな緑の合間に、春の訪れと共に一斉に開く花は目に滲みるように美しい。人々は庭の一隅にそれを眺め、直ぐ訪れる乾いた長い夏への移ろいの一時を楽しみながら休息をとるのである。日本の正月のように、互に親類を訪れ、知己



を訪ねて交りを新たにす。また旅行に出る。イスラム教の国ではラマザン Ramazán という断食の月があり、この月にはイスラム教徒は毎日(日出から日没まで)飲食を断つことになっているが、このような時でもないで正月 nouruz は一年のうちで最ものんびりしたときである。

私はテヘランにいる間、国連に所属していたので、日本の祝祭日には在留の日本人達とその日を祝い、クリスマスには project manager や同僚のパーティーに加わり、nouruz には休暇をとるなど誠にのんびりしたのであるが、帰国後間もなく学内は次第に騒然となり緊張の度を加えて遂に学園紛争となった。その頃ふとイランの正月を振り返ると夢のように思えたものである。

テヘランの旧市街のほぼ中央に“Gulestan” Palace —ばらの宮殿という意味—という旧王朝時代の宮殿

がある。今は中央官庁街のビルの谷間に隠れかけているが、ヴェルサイユ宮殿を模して造ったと言われる内部の装飾は絢爛そのものである。中でも目立つのは宝石を鏤めた王座と宮殿の隅々まで隙間無く敷き詰められた高価なペルシヤ絨氈である。イランでは地方色それぞれに豊かな様々な絨氈があるが、中には花模様を織り上げた美しいものも少なくない。辺地の農家にも絨氈があり、山の茶店の露台にも絨氈を布く。貧富貴賤を問わず、物の高下を問わず、絨氈はイランの生活そのものの一部となっている。多分、このクリスマスカードにあるように花を恋う心がそうさせるのもあろうか。

ペルシヤ絨氈は値が高くて仲々買えない。しかし、人を暖かく客間に招じるにはともかくも絨氈を敷かなくてはならない。私達もその例外ではなかったが、岩と石と砂の風土から生れた自然の慣わしであろう。